



寝取られ特異点

～大事なサーヴァントたちが当然のよつに寝取られる学園～

Presented
by 530

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

いつものように修正に訪れたある特異点。
しかしそこでは何かが違っていた...

はあ
はあ

たゆん
たゆん

マスターは
違和感を覚えたついても
どうすることもできない...

当たり前のように
赤の他人とセツクスする
カルデアの仲間たち♡

おっ
おっ
おっ

たゆん

おっ
おっ

たゆん



特異点の中心——学園では
男の価値はち○ぽで
決まる!!

長い時間かけて策いた
絆レベルもあつさり逆転♡

りりり♡

お♡

落第短小ち○ぽの
童貞マスターは
虐げられ!!

彼女たちは
変態どもの
虜に!!♡

ちよお♡

ねたあ♡

あ♡
しゅ♡
ふん♡



そして十ヶ月後…
受肉し、妊娠した
彼女たちは臨月を迎える…



果たしてマスタリは
この特異点を修正する
ことが出来るのか!!!
できません!!!

※特異点にかじつけた
世界全体催眠NTR
みたいなのは感じです。



基本CG23枚+α(カットイン等その他差分多数)



SS版・吹き出し版・書き文字のみ版・文字なし版の4パターンを収録

「ん……………?」

「……は……………?」

「確か俺は……………カルデアで……………」

「ん……………」

ほら…

「はいは……………」
「確か俺は……………カルデアで……………」



「ん……………」

ほら…

「はいは……………?
確か俺は……………カルデアで……………」



「あ……
おはよんいじゅとあか
先輩……っ♡」

ほら……

「っ……ムツム」



「…ハッハッハッ…」

「…はっはっはっ…
拠点として使わせて
いただいている部屋ですよ？
今回の特異点を調査するため
昨夜場所をお借りした…んっ
じゃないですか。」

「…大丈夫ですか先輩？
どこか具合でも…？」

ぼろっ…

はぁ

「ああ、そうだったけ…
…うん、大丈夫…」

はぁ

マシュとの
絆レベル：5

「特異点の修正…
そうか…いつもの…
だよな…」

「ふふ…先輩、もしかしてまだレムレムしてます？もう少しお休みしてますか？」

「いや……大丈夫。ちよつとぼーつとしてるだけだから」

「そうです、か…っ♡
じゃ♡あ、眠気覚まし♡」
「ーヒーでも淹れますね♡」

「うん、ありがとうマシユ」
(ん……っ？)
なんだこの音…)

ぼーっ…

はぁ

レムレム

「いえー
あ、ちよつとだけ
待ってくださいね」

はぁ

レムレム

(それにマシユ…
なんか息が荒…)
「いっ」

「う……ん……?」

「どうしたんですか先輩?
不思議そうな顔して…
私はただ普通にい…♡」

「美少女後輩といつでも
自由に交尾できる生活
最高お〜♡♡」

「おじさまと
生ハメ交尾♡」

「してるだけじゃあない♡
何かおかしいことでも〜」

「ふう〜っ♡♡♡いよお
マシユちゃんっ♡♡
朝イチ交尾捗るよお〜っ♡
起きたらそのまま
朝勃ちち○ぽ即ハメ♡」

「いや、あれ…?」

はあ
はあ

「そうだよな…?
たやん マシユは普通の
たやん ことをしてるだけ…
だよな…」



「いや……はは、まだ寝ぼけてるのかな？何かがおかしい気がして……その人は……この家を賞してくれた人……だったよな」

「そうですよ♡
もう、先輩つたら……」

バババババ

ニッ

ニッ

グブグブ
ヂュヂュ

「ごめんねえ〜♡
キミの大事な後輩ちゃん朝から頂いちやって♡こんな可愛いハメ穴が歩いてたら我慢できなくてさ〜♡♡♡」

「いいえ……
お気にならず……」

ニッ

ニッ

「見ず知らずの私たちに拠点を提供してくれたんですよ？
身体でお礼をするのは当然じゃないですか♡
先輩も納得してたでしょう？」

「うん……そう……だよな……」

ニッ

「おかげでち○ぽ超幸せだよお〜♡
あ、ごめんついでに……このまま膣内射精するけどいい？」

「らわらわら♡♡♡」

はあはあ

たっちゃん
たっちゃん

「え……？
そ、それは——」

「FES-UNNUN♡」



BUZZ BUZZ

?

アッ

アッ

アッ

「……」

「……」



「ふふ…っ♡♡
おじさまスゴイです…っ♡♡
昨日もあんなにしたの♡♡
私の子宮おなかもうらっ♡♡」

ゼュらん♡

「ふひひひ
そうだったねえ♡
膣内射精とか
今さらだったね♡
なんせもうさんざん
愛し合った仲だもん
ね♡僕たち♡」

「え……」
ゼュらん♡

ズグウウウッ

ゼュらん♡

「はいつ♡
……あれ、先輩
どうしました？(笑)」
「いや…なんでも……」

10/10
ゼュルルル♡
ルルッ

キキョウ

(なんでだ……？
なぜか悔しい気が
して……胸が……
マシユ……)

「身体の相性も超抜群♡
まだ出会って半日だけど…
もしかしたらもう
ずっと一緒に旅してきた
先輩より深い絆で結ばれ
ちやってるかもねっ♡」

ゼュッ♡

ゼュッ♡

「さういうのは
時間じゃない
からさ♡
あゝまだ射精る♡」

マッシュとおじさまの
絆レベル：50♡

「そうかも
しれませんが…
先輩とは一度も
セックスしたこと
ありませんし…」

「あ、そうなんだ(笑)
もしかして先輩くん
は童貞かな？」

「それですら
ね、先輩？」

「……………うん…」

モウ♡

10/10
ゼュッ♡
ルルッ♡

ゼッ

ズグウウウッ

ゼュッ♡

「はい、先輩♥
コーヒーお待たせ
しましたあ♥」

「あ、ありがとう…
えっと…マシユ…?」

「あ、ちよつと
待っててくださいね〜♥
いまミルクも入れて
あげますから…♥」

はあ

はあ

「え……?」
み、ミルクって…」

「はい♥
もちろん——」

ど

ろ

ぐ

トロ

ほが

ほが

「ぶ〜すつきりした♥
じゃあマシユちゃん
また後でね〜♥」



「私とおじさまが作った特別ブレンドです♡」

「う……っ」

「まあ実際はほとんどおじさまの精液ですけど(笑)味は私が保証しますよ♡」

ん♡♡♡

「ふふ、どんどん溢れてきます…♡
ほら、見てください先輩♡
先輩が寝てる間にこんなに膣内射精されちゃって…♡
ああ、もったいない♡」

ブルン♡

「もう、先輩ったら…
せつかくの精液をわけていただいたのに失礼じゃないですか♡」

「い、いめん…」

ど♡ど♡

た♡た♡た♡

「それじゃあ私がいただきますね♡」



いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに
いっしょに

「でも今は我慢して
くださいね？
そろそろ出ないと
遅刻しちゃいます
から…」

「えっ？
遅刻って…？
そういえばマシユ
その服は…」

「はい♥
昨晩行った調査によると
この特異点の中心は
ある学園……」

55



んんんん
んんんん
んんんん

「というわけで
場所に合った礼装を
用意しました♥
もちろん先輩のも
ありますから…」



んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん

んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん
んんんん

「……ふふ♥
だからそのカワイイ
勃起(?)ち○ぽは
いったん取めて
早く着替えちゃって
くださいね、先輩♥」

「う…うん…」

寝取られ特異点

～大事なサーヴァントたちが
当然のように寝取られる学園～

特異点の中心にある
とある学園——

廊下——
教室へと続く



「ここが特異点の中心…
見たところ普通の学園
だけど……」

「ええ、昨日
調査を行った限りでは
特に変わった点は
見られませんでした。
これまでの経験から
もっと異常な環境を
想像していたんですが…」

「これといって
魔獣が出るわけ
でもなく、
そういう意味では
いたって平和な
学園ですね」

「うーん……
これまでの特異点とは
何かが違うのかな」

「マッシュは昨日も
はいごさつ。」

「はい、この特異点に来てすぐ
転校手続きという名目で
少しだけ潜入調査を。」

私以外にもカルデアから
同行したサーヴァントたちが
調査にあたっています」

「そっか。」

みんなももう
この学園に？」

「はい。」

みなさんもう
登校されている
はずです」

「あ、先輩
そこ段差があるので
お気をつけて」

「うん。」

ありがとう、マミィ」

「いえ、私は貴方の
サーヴァントですから、
これくらい……」



「……先輩。」

今回の特異点は
いつもと勝手が違う
かもしれないが……
頑張りましょうね」

「そうだね。
必ず聖杯を見つけて
回収しよう——」



「あ、先輩
そこ段差があるので
お気をつけて」

「うん。」

ありがとう、マミヤ」

「いえ、私は貴方の
サーヴァントですから、
これくらい……」



「……先輩。」

今回の特異点は
いつもと勝手が違う
かも知れませんが……
頑張りましょうね」

「そうだね。
必ず聖杯を見つけて
回収しよう——」



「？」

「……………あー！
マミヤはあああ
あ~~~~んっつ」

「えっ？」



「おっはよお〜♡♡♡」

「!？」

すま♡♡♡

はっ♡♡♡

ア♡♡♡

み♡♡♡ぢ♡♡♡ぢ♡♡♡

ア♡♡♡

ア♡♡♡

ア♡♡♡

「おーっ♡♡♡」

もみ♡

「うひひひいっ♡
ラッキいっ♡
朝からマッシュさんに
会えるなんてっ♡♡
ちようどハメたい
なあっ♡♡♡
たんだよねえっ♡♡」

「な……っ♡」

「おっ♡♡♡
おは……っ♡♡」

もみ♡

トッ♡
チュ♡
ッ♡

ゼッ♡

トッ♡
チュ♡
ッ♡

ズッ♡

ズッ♡

トッ♡
チュ♡
ッ♡

ズン

「おはよおっ♡♡♡
「ジュウももっ♡♡」

「うん、おはよう♡
今日も朝からイイ腔
してるねえっ♡
ち○ぽでタイト突き
破って一気に奥まで
気持ちいいっ♡♡」

「あ、あんた…
いきなり何を…っ♡」

「???. 何って…」

セックス
挨拶だけど?
あんた誰?」

「そうなんですよ、先輩っ♡
これはただの挨拶…!」

「朝クラスメイトに
会ったら普通にする
おはようの
セツクスですっ♡」

「え……?」

「そっ♡そのために
下着もつけていない
んですから…っ♡♡♡」

「そういふこと♡
出会い頭に即合体
できるようにね♡」

もみ♡

トチュッ♡

トチュッ♡

トチュッ♡

ゼッ

ズン

ズン

「とっろで…ひひ♡
キミが噂の『先輩』か♡
朝からお手々繋いで
登校なんて仲いいね♡
まだ繋ぐ前だったかな(笑)」

「え、俺のこと
なんで…?」

「マッシュさんから
話は聞いてるよお♡
短小ち○ぽの童貞(笑)
だけど優しい先輩だっ♡」

「あ、その話は…っ♡」

「ナイシヨだった?
ごめんごめん♡」

「……ん、ん、ん」

「じ、実は昨日……私は一足先に自分のクラスに紹介されてまして……♡」

「それでクラスメイト全員とお話しセックスしたんだよね♡
そのとき先輩さんの小ささに気づいちちゃったのかな(笑)」

「全員……!?!」

もみ♡

ト♡
チ♡
ユ♡
ッ♡

ぞの

ト♡
チ♡
ユ♡
ッ♡

ズ♡
ッ♡

ズ♡
ッ♡

「ごめんなさい先輩♡
おじさまだけじゃなくて……私、先輩の知らないうちに昨日だけで経験人数50人超えちゃいました……♡」

「他のクラスからも来てたからね♡(笑)
一周するの時間かかったよ♡」

ズン

ト♡
チ♡
ユ♡
ッ♡

「俺なんか三回も腔内射精しちやっさあ♡」

「先輩に無断で……ごめんなさい♡
でもまずはそうやって身体の相性を確かめ合うのが友好な関係を築く近道ですから……♡」

「そうそう
気にしなさんなっ♡」

「別に浮気♡
してるわけじや
ないんだからさ♡」

「ただ気軽に他人と
交尾してるだけで♡
ね、マシユさん♡」

「はいっ♡
私は先輩のサーヴァント
ですからっ♡」

「あくまで挨拶っ♡
友好関係を築くための
手段ですっ♡」

もみ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ズン

ズン

「まあそういう
ことなんで(笑)
むしろこんな
普通のこと
怒られてもな」

「いや、怒ってる
わけじや……
……そっか……
……そうだよな……
これが…普通…」

(また……
なんだこの
違和感……)

「お、さすが
優しい先輩(笑)
じやあ遠慮なく
膣内射精させて
もらいますね♡」



「ははははは」

おはははは

ははは

ははは

ははは

ははは

「ははははは」

「いや、それにしてもマシユさんはホントにいい子ですね、先輩さん」

「え……」

「俺みたいな陰キャにも分け隔てなく膣内射精させてくれて♡」

「な…何言ってるんですが♡男性は見た目や性格じゃありませんよ…♡♡大事なのはち○ぽの大きさですっ♡」

「#トシム…♡」

マシユとクラスメートの絆レベル：35→40♡

ぞのぞ

ググググググ!!

ゴッゴッ

ググググ

「そっからそうだよね♡じやなきやとつくくに先輩ともセックスしてるもんね?」

「え?」

どろろ

「……あつぎ、気にしないでくださいね、先輩♡っい……」

「5、5や……」

「じゃあそろそろ
教室行こつか
マシユさん♡」

「はっ♡」

「……では先輩、私は♡
先輩もご自分の教室に
向かってくださいね」

「わ、わかった…」

はぁ

はぁ

「別行動になって
しますが、
お互い調査
頑張りましょう♡」

ふん

ふん

「うん。
マシユも」

「あ、そうだ！
せっかくだし
このまま繋がって
教室まで行って
みない？（笑）」

「あはは、
いいですね
それ♡」

トド

「では先輩、
また」

「……」

「.....」

「
」

「
」

「
」

「
」

(おかしら……..
やっぱりこの違和感……
勘違いじゃない気がする)

ザッ
ッ
ッ

ザッ
ッ
ッ

あ、

あ、

(でもその中で、
どうしようもなく
気持ちが悪される
場面があった。
悔しいような
情けないような……
なんとも言えない
感じ……)

(……学校の様子は
教室に入ってから
別段変わったところはない。
みんないたって普通の
学生といった雰囲気だ。
マシユの言っていた通り
……この特異点^{せかい}に
異常な点は見られない)

(教室^{こくし}に来るまでに
もう2回……
朝起きたときと、
さつきマシユが
クラスメイトと
挨拶をしていた
ときだ……)

(どつちのときも
マッシュが一緒だった…
彼女がしていた行為に
問題があるのだろうか？
マッシュは普通のことを
していただけなのに、
何か取り返しのつかない
ことが起きてるようない…)

ザッ
お

ザッ
お

あ、

(もしかして、
気がつかないうちに
特異点の影響を
受けている…?)

「ねえ」

あ、

(何か異常なことが
起きてるのにそれを
異常と感じさせない…
それがこの特異点の
特徴なのかもしれない。
……だとしたら、
早く原因を
つきとめないと—)

「ねえ、ちよこ」



「やっやっ。聞いよおねえ」

「..」

「ようやく顔を
上げましたね。
せつかくこの私が声を
かけてやってるのに
無視をするなんて…
焼き殺されたいの？」

「オルタ……！
君も同じ教室
だったんだ」

「今ごろ気づいたわけ？
まったく…暗い顔して
入ってきたと思ったら」

「そんなことでは
先が思いやられますね」

「そうだよね。
ごめん…」



「まったく……あの『後輩』に何かあった？」

「え？なんで……」

「アムタが悩むなんてそれくらいいしかないでしょう。」

「……今朝も仲良く一緒に登校してきたみたいですか？」

「……オルタには敵わないなあ。実はちよつと……なんとというか違和感を覚えることがあつて——」

「違和感？」

マシユの言動に？

それとも……

この特異点にかしら。

詳しく話さない。

それともこの私では

頼りになる後輩の

代わりにならぬ

とでも？」

ジャンヌ・オルタとの絆レベル：10

「そんなことない。二人とも頼りにしてるよ。実は……確証があるわけじゃないんだけど……」

「は」



「おはようっ♡
ジャンヌ♡」

「ゴッ
ツ」

「ア
ッ」



「な…なんだ!?
いきなり」

グロ

「ひょろろ……っ♡
人がひやべっへるのに
いきなり突っ込む
なんて……
歯が当たつれも
知らにやいわよ♡」

グロ

「ごめんごめん♡
でもジャンヌが
彼と楽しそうに
喋ってるの見たら
なんか勃っちゃってさ♡
ちよつと一発
抜かせてもらおうよ♡」

ジャンヌ・オルタと
クラスメートの
絆レベル：45♡

みち

「ひょろろがない
わね……っ♡♡
これがクラスメイト
じゃなけりや殺ひれる
ところよ……♡」

「……………」
「ま、また……
くそ……なんなんだ
この感じ……っ」

「キミ、転校生だよな？
ジャンヌとは前から
知り合いなの？」

グワッ♡

「う、うん……
同じところから
来たから……」

「へえ、そうなんだ♡
じゃあ知ってるから♡
コイツの口ま〇こ
けっこうイイよね♡」

グワッ♡

「い……いや……俺は……」

「知らないわよ
ソイツ童貞だから♡」

みちこ

「え、マジ？
その歳で？
こんなすぐやれる
女がそばにいたのにな？
マジメだね」

「俺たちなんか
昨日会ったばかり
なのに即ハメだよ♡
その日のうちに
全穴フルコンプ♡
ね、ジャンヌ？」

「……」

「うるひゃいわね……♡
ひよんなころより
いま大事な話してるん
らけど？」

「あ、ごめんごめん♡
じゃあすぐ射精し
ちやうから♡」



「？」

「アハハ！」

アハハ!

アハハ!

アハハ!

アハハ!

「おほっ♡おほっ♡
おほっ♡おほっ♡」

「ひひ、これこれえ♡」

「それにジャンヌって
こう見えてけっこう
マゾでさ〜♡♡
ち○ぽで窒息すると
悦ぶんだよね♡」

おほっ♡

おほっ♡

おほっ♡

おほっ♡

「ジャンヌの口ま○は
喉がいいんだよね♡
あ、知らないんだっけ(笑)」

「ちよ、ちよっと
やりすぎじゃ…」

「いやいや大丈夫大丈夫♡
童貞の君にはわからない
だろうけどこれが
女の口はこうやって
使うのが普通だから♡」

おほっ♡

おほっ♡

「ほら見て♡
喉きゅ〜っと締めて
完全にち○ぽ受け
入れてるでしょ♡」

「おほっ♡おほっ♡
おほっ♡おほっ♡」

「オルタ……」

「ん〜これこれ♡
やっぱ朝はこれに限るっ♡
ジャンヌのおかげで今日も
一日元気に過ごせそうだよ♡」

「ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡」

「ジャンヌも栄養補給できて
ウインウインでしょ♡
朝食はしっかり食べなきゃね♡」

「オルタ……」

「ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡」



「ジュウ」

「ジュウ」

「お、オルタ……?」

「あ、やべ…
もう授業始まるじゃん♡
んじやまたたね〜♡」

「ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡
ジュウ♡♡♡」

「うわ!?!」



「お、オルタ…っ
大丈夫!？」

はー♡
はー♡

「げほっ♡♡♡
ごほっ♡♡♡
……な…何を
騒いでるんです？」

たっ♡ただ…っ♡
酸欠アクメをしながら
飲み込んでた精液が
逆流して…ザーゲロ
キメただけでしょう?♡♡

と♡

べと♡お

「それくらい童貞でも
見たらわかると…
思いますがつ?♡♡」

「そ…そうだけど…
あ、あれ…?」



「はあ……♡はあ……♡
そ……それよら」

「話は何だったわけ？
まさかマシユが
誰かとヤツてたなんて
くだらないこと
だったら殺すわよ？」

「はあ……アンタねえ。
サーヴァントたちが
誰と何をやるうが
問題じゃないでしょ」

「それともなに？
周りの女はみんな
処女じゃないと
許せないわけ？」

と

べと

ふ

る

「そ……
そういうわけ
じゃないん
だけど……」

「女の経験人数を
気にするなんて
度量の狭い男の
することよ」

「……まあいいわ。
授業が始まるから
話の続きは後でね」

「お前ら座れ
授業始めるぞ」

「……と、その前に
今日も転校生が
来てるはずだが……
ああ、いたな。
きみ、ちよつとだけ
自己紹介を頼むよ」

「あ……はる」

「カルデアから来た藤丸です。よろしく…!」

「もう聞いてる者もいるかもしれんが、藤丸はまだ童貞だ。みんな優しくしてやれ!」

「は〜ん!」

「え……?」
「な、なんでそれ…!」

「安心しろ藤丸、俺がきちんと童貞卒業までサポートしてやる!」

カルデア
ってどこ?
外国?

知らねーけど
ジャンヌも昨日
そう言ってたよな

なんか頼り
なさそー

あいつ童貞
らしいよ(笑)

マジ?
絶滅危惧種
じゃん(笑)

「は〜ん!」

「は〜ん!」

「幸い一時限目は俺が担当する保健体育…それも今日はセックス実習だからな!」

「そうだな…
それじゃあ藤丸はジャンヌとペアを組みなさい。
知り合いならやりやすいだろ?」

「……………」

「はあ…
仕方ないわね!」

「よし、準備できたかな？」

「それじゃあセックス実習を始めるぞ！まず女子は仰向けに寝転んで胸とま〇こを男子に見せろ♡」

「ん……」

「よく見えるようになるべく下品に大股を開いて手は頭の後ろでしつかり組めよ♡服従の意志を身体で示すんだ♡」

ぱん♡

みち♡

みち♡

ん♡

「恋人なら手を繋いだり抱き合ったりもするがそんな場合はほとんどないからな♡」

せーん

「その基本姿勢をしつかり覚えるんだぞ♡」

「お、オルタ……」

みち♡

「あ、あのオルタが…
こんな無防備な姿を晒して…
そ…それにこれからオルタと…!？」

「この授業って…
こ、これも普通
なんだよな…?」

「よし、そしたら次は
男子の番だ!
ち○ぽを15センチ
以上に勃起させる」

「え……!？」

「最低でも10センチだぞ、
そうしないとセックスは
不可能だからな」

ぱんぱん

みち

みち

ん

「……ちよひと、
アンタ何してんのよ?
早く勃起させなさいよ—
それとも私じゃ
勃たないってわけ?」

せーん

みち

「さあ……
……ちよひと……」

「……はっ
嘘っつね……」

「ん？
どうした藤丸
調子悪いのか？」

「さ、さやいねは…」

「はあ………つたく………
………センサー………
藤丸はこれで
限界らしいです」

ギョ

「なに？
そいつはまずいな……
少しなら大目に
見てやることも
できたが……」

「それじゃあジャンヌが
処女だったとしても
処女膜を破れないじゃ
ないか(笑)」

「……………」

「仕方ない、
まずは俺が見本を
見せてやる♡
ちよつとそこを
代わりなさい」

せつ

せつ

「ほら！
勃起っつていうのは
こうするんだ♡」

ドキドキ♡

「……♡♡」
「ほら、凶悪ち○ぽを
見せつけければ自然と
女も欲情する♡
簡単だろ？
見ろこの物欲しそうな顔♡」

ドキドキ♡

ドキ

「俺のは30センチ
はあるからな♡
参考にならん
かもしれんが…
せめてこれの
三分の一くらいは
頑張ってくれ(笑)」

「……」

ドキ

「このまま
セックスの仕方
も教えてやるから
お前はしつかり
見学するんだぞ♡」

ドキ

「んお♡おっ♡」

「えっ」

「んっほら入ったぞ♡
これでジャンヌと俺は
今セックスしてるわけだ♡
……んっどうした？
あまりにあっさり
挿入したから驚いたか？」

「まあっこんなもんだ♡
童貞のお前には想像
できんかもしれんが
俺にとつては
日常茶飯事だからな♡」

せりっ

せりっ

キゅん

キゅん

「おほ♡おっ♡」

「それよりよく見とけよ♡
まずはこうやって
浅めの感触を亀頭で
味わうんだ♡
気分にもよるが(笑)」

ぬほっ

ぬちゅ

ぬほっ

「んお♡」

「そしたらま〇こは
すぐに馴染んで
くるからなあ♡
そっで「気いらっ」

「突き刺すっ♡♡♡」

たゆん♡

たゆん♡

「おほほっ♡
これだこれ♡
根元まで一気に
挿入っ♡♡♡
気持ちいい
っ♡♡♡」

ギギ
ッ♡♡

おほっ♡♡♡

おほっ♡♡♡

「わかるか藤丸、
女をち○ぽで串刺し
にしてやるっ♡♡♡
これがセックスだ♡」

「竿全体で
膣内の感触を
味わいながら
亀頭で子宮を
滅多突きっ♡
ほらジャンヌも
嬉しそうに
のけ反って♡」

ズン
ズン
ッ♡♡

「おーやーっ♡♡♡
おらっ♡♡♡おらっ♡♡♡」

「心配するなっ♡
これくらい
何でもないっ」

「腰をがっちり固定して
引き抜かず奥へ奥へと
突き進み続けるのが
コツだっ♡♡♡」

おっ♡♡♡

たゅん♡

たゅん♡

おっ♡♡♡

おっ♡♡♡

おっ♡♡♡

「女は元々ち○ぽを
受け入れるように
設計されてるマゾ
なんだからなっ♡♡♡」

「本気で
突かなきゃ
ダメだぞっ
おらっ♡♡♡
射精すぞっ♡♡♡
マゾ女っ♡♡♡」

ズン♡♡♡
ズン♡♡♡
ズン♡♡♡



アッ! ぷんぷん!!

アッ! ぷんぷん!!

アッ! ぷんぷん!!

アッ! ぷんぷん!!

アッ! ぷんぷん!!

アッ! ぷんぷん!!

アッ! ぷんぷん!!

「ただ闇雲にシコるなよ
ちやんとジヤンヌの
膣内の感触を想像
するんだっ♡」

「ふう♡
う…っ♡」

シッ

おっ♡

「ぎゅっつと
押し返してくる
膣内を掘り進むと
ひだひだがねっとり
絡みついてきて♡」

「いっちばん奥で
ぶるっぶるの子宮口が
亀頭に吸いついて
くるんだっ♡♡
これは数あるハメ穴の
中でも相当名器だぞ♡」

くちゅ♡

シッ

おまえ
「童貞には難しい
かもしれんが(笑)
できる限り具体的に
イメージしろっ♡」

「オルタの…膣内…っ♡」

おっ♡

おっ♡

みぢ♡

みぢ♡

くちゅ♡

くちゅ♡

パチン♡
パチン♡

パチン♡
パチン♡

「ほれ藤丸っ♡」

だっ♡

「ジャンヌの顔をじっくり見ろ♡」

だっ♡

だっ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡ 「んっ♡」



「女にこのアホ面をさせるのが最終目標だぞ！」

おははは

「それにはまず今の三倍はち○ぽを大きくしなげりや話にならんっ♡」

「あ、あのオルタが…こ…っ♡こんな表情するなんて…っ♡」

おははは

おははは

ぐちゅ

たむん

「特にジャンヌみたいなのは難しいぞっ♡」

る

たむん

る

ぐちゅ

「俺でも墮とすのに一晩かかったんだからなっ♡」

る

おははは

「よし、射精したな♡」

おぼろ

「最後のほうは
ちやんとできてるか
怪しかったが…(笑)
まあいいだろう」

ぷるん
ぷるん

「初めはそんなもんだ。
……それにしても
随分量が少ないな?
ちやんとメシ食べてるか?」

んんん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぷるん

「今もう一度手本を
見せてやるからな♡
射精ついでというのはあ」



「うんうんする
んだっつる」



ピンクの尻

うん

?

フェツ

ズチュル〜ッ!!

「ん〜いいぞおジヤンヌ♥
またちや〜んと膣内射精
受け入れられたなっ♥
それでこそ俺の生徒だ♥
可愛いヤツめ♥」

「う…っ♥
お、オルタ…っ♥」

「ん？なんだ藤丸
また射精したのか♥
なんだそのお漏らし
みたいな射精は(笑)
さつきも言ったが
寝取られた気持ちに
なってシコるのは
逆効果だぞ？」

「寝取られ
オナニーは
癖になる
からな(笑)」

ジヤンヌ・オルタと
教師の絆レベル：
55→60♥

「う…っ♥
ふう…っ♥」

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

びゅん
びゅん
びゅん

びゅん
びゅん
びゅん

トロ

ドクッ

ドクッ



1時間後——

「ふんっ!!
ふんっ!!
ふんっ!!」

ズ
ズ
ズ

おは
おは
おは

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

おは
おは
おは

おは
おは
おは

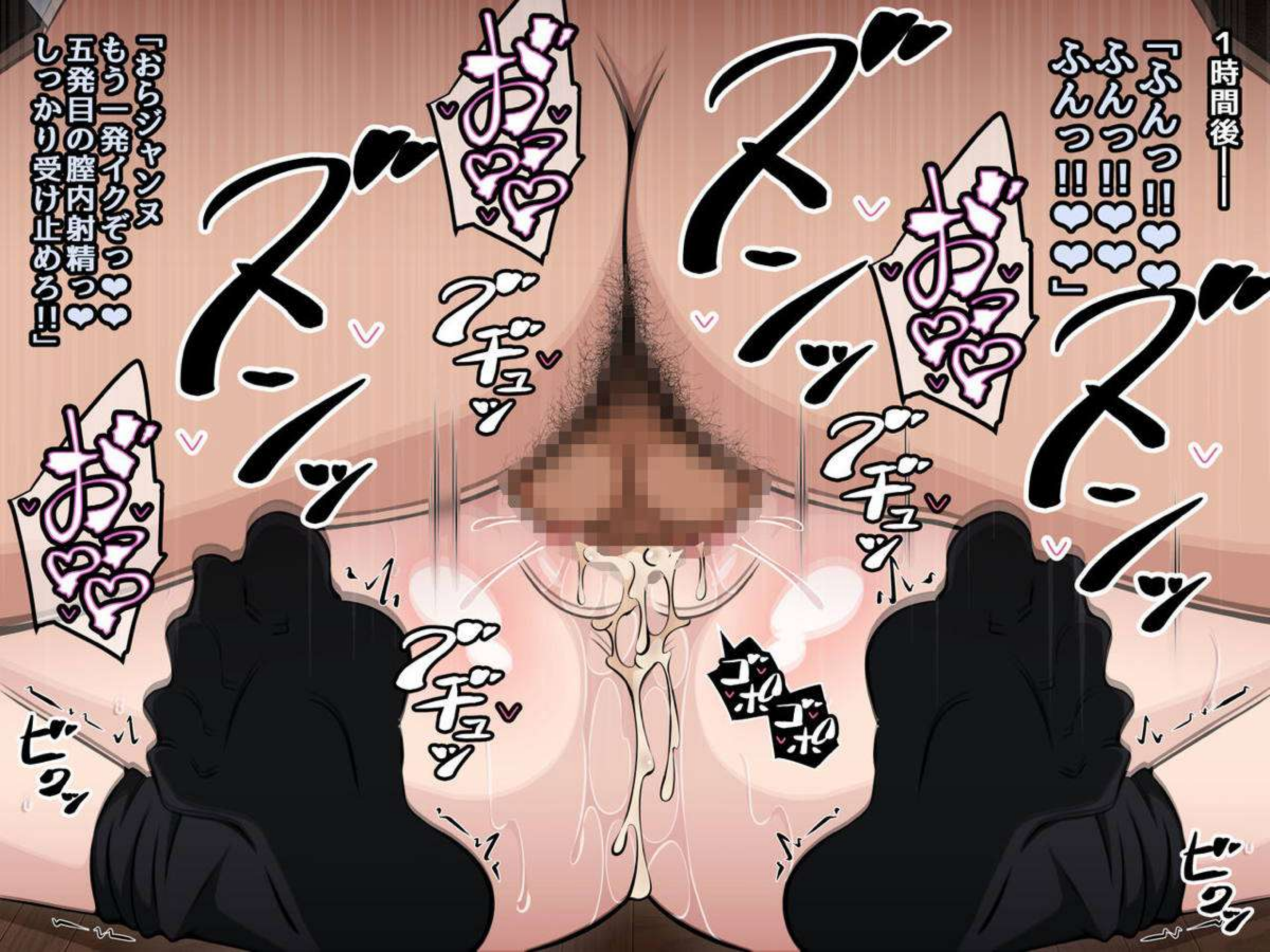
おは
おは
おは

「おらジヤンヌ
もう一発イクぞっ♡♡
五発目の膣内射精っ♡♡
しっかり受け止める!!」

おは
おは
おは

おは
おは
おは

おは
おは
おは



「んへっ♡♡♡」

「うわ……っ」

「ひっひひ♡
どうだ、藤丸？
これがセックスで
女を支配するって
ことだ♡」

「例えばこの
俺が膣内射精した
精液をぜんぶ
お前が射精したと
想像してみる♡
支配感エグいだろ？」

♡♡♡
♡♡♡

ズムッ

ポポポッ

ポロッ

「はは、想像も
できないか(笑)」
ム

「俺は感じてるぞ、
気に入った女を
やりまくってれば
勝手に堕ちる♡
そんなイイ仕事は
ないからなあ♡」



「さて、俺が教えてやれる基本はとりあえずこんなところだ♥藤丸は他の生徒のところも見学してみたらどうだ？」

「え……」

「安心しろ、二時限目もこのまま延長して保健体育だ俺もまだヤリ足りないからな♥ジャンヌのせいだ♥」

「えへ♥えへ〜♥」

ズムッ

グッ

ポポポツ

ポロッ

「色んなセックスを見るのも勉強だぞ！ほら行った行った」

「は、はい……」

「寝取られオナニーには気をつけろよ(笑)短小童貞が一番陥りやすいところだ」

「寝取られマゾ側が

染みついてしまうと戻れないからな(笑)」

？

「

？

「.....」

「あれは.....」

「お
お」

「お
お」

「お
お」

「お
お」

「ふふっ♡」

10
3



「授業にかこつけて
私に触れようだなんて…
とんだ身の程知らずね
貴方たち」

「この私がそうやすやすと
身体を許すわけないでしょ？
殺されなかつただけ
ありがたいと思いなさい」

（メルト……！
周りに倒れているのは
男子生徒たちだ……）

うず

うず

うぐ

うぐ…

う…

うぐ

うぐ



「ふふ…残念ね、制服に合わせるで零基を弄っていで。いつものヒールだったらもつと酷い目に合わせてあげられたのに♡」

「本当ならこのまま溶かして養分ゼリーにしてやりたいところだけど…それは我慢してあげるわ。貴方たち味気なさそうだし」

（あの様子だと…）

保健体育の授業で相手をしようとした生徒たちを返り討ちにしたのか…？



うず

うず

うぐ

うぐ…

う…

うぐ

うぐ

「……………」

(なんとなく…ほっとした気がする。
なぜだろう。メルトの行動は
特異点
この学園を調査する目的には
そぐわないのに……)

(ちゃんと学園に溶け込んで
馴染んでいたマシユや
オルタを見たときより…
ずっと…安心してる……?)

「いい?
私に触れていい人間は
あの人だけなの。
貴方たちみたいなのには
間違っても指一本——」

うず

うず

うぐ

うぐ…

う…

うぐ



「メルト」

「ありがた
来てたのね」



メルトとの
絆レベル：10

？

「ご主人様っ♡♡♡」

ひゅん

「おっおっ」

んんん

ちゅ

んん

んん

!?



「ふあ…っ♡
ご主人様あ♡♡」

「んひひ♡
おはよ〜メルトちゃん♡」

ぬも♡♡
ぬも♡♡

「相変わらず甘くて
美味しい唾液だね♡
溶けちゃいそう♡
遅くなつてごめんね♡
ちよつと色々あつてさ〜」

「ん〜ん、平気♡
ご主人様が来るまで
アイツら虐めて
遊んでたから♡」

はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

「あ、もちろん
身体には指一本
触れさせてないわ♡
私はご主人様の
モノだから…っ♡」

「うんうん、
わかってるよ♡
メルトちゃんは
ホントにイイヨ
だね♡」

「め、メルト…!!!」

「……あら。貴方もいたの？」

「ええ、まあ……ただの顔見知りつてところだけど。ね？マスター？」

「え……ま、まあ……うん……」

ひちぢ

ひちぢ

「そうかそうか♡可愛い子ばかり周りにいて羨ましいよ(笑)」

実は僕この学園に特別講師として呼ばれていてね♡ときどきこうして指導にきてるんだ♡メルトちゃんともそのとき会ってねえ♡♡」

「おや、君は…『先輩くん』じゃないか。また会ったね(笑)」

「……」
(この人…朝マッシュとしてた…
拠点を貸してくれてる…)

「メルトちゃんも彼と知り合いだったんだね」

「ええ。それで指導を受けているうちに気がついたの」

メルトとご主人様の絆レベル：70♥

「もちろん、貴方に言われなくても特異点の調査は問題なく進めているわ♥というかこれもその二環なのだし…！それもわかってるわよね？」

「……うん……」

ひちやん

ひちやん

「この人が私の本当の主人様なんだって♥
メスが強いオスに支配されるのは当たり前……
知っているわよね？」

「う、うん……
で、でも……」

「そうかそうか納得してくれたならよかった♥
調査とか特異点とかはよくわからないけど…安心したよ、もし君がマシユちゃんやメルトちゃんのこと好きだったら悪いからね(笑)
二人とも先に僕が頂いちやつて♥」

「代わりと言っちゃ
なんだけども
特別に君にも
指導してあげるよ。
見たところ君、
童貞卒業資格
ないでしょ?」

「ち○ぽでメスを
支配できない
弱いオスは
メスに虐められて
強くなるもの
だからねえ!♡
そういう意味じゃ
メルトちゃんは
適任でしょ!♡」

「え?」
「あ……は……」

「そうだなあ……
じゃあメルトちゃん
彼のこと
虐めちやおつか!♡」

「え?」

「……」

ひちぢ

ひちぢ

ぐらぐら

「ああ、そういうこと……
わかったわがご主人様♡
ほら貴方も
ぼさつとしてないで……
さっさと
ズボン降ろして
こっちに來なさい!」

「……」

「め…メルト……」

「ちよひんよ。」

「じゃあおまじないをさしなさいよ〜」

「ん〜」

「ただでさえ
親指サイズの租チン
のくせに……
この私を前にして
勃起していない
じゃない」

「これから私が
虐めてあげるって
言ってるのよ？」

その恥ずかしい
短小ち○ぽ充血させて
フル勃起するのが
当たり前でしょう」

ほうん

「…それとも私じゃあ
勃たないって言うの?」

「い、いやそつごう
わけじゃ…」

「実はさつごうまじ
オルタとの授業で
その…何度もお…
オナニーしてて…」
「そんなの言い訳に
ならないわ」

「いえ、私を差し置いて
他の女にかまけてた
なんて余計に夕チが
悪い」

ぽん

「仮にもマスターだし
手加減してあげようか
とも思ってたけど…
これはキツイ
オシオキが
必要なようね」

「ほらー！早くこのクズち○ぽ勃たせなさいっ♡
じゃないと一生勃起できなくなるわよっ♡」

「あっ
う……っ」

「それともこのまま踏みつぶされたいのかしら？」

「私は別に構わないけど？
「こんなモノ」」

「め、め……っ」



「んん…っ」

「ふふふ♡」

「そうよ、やれば」

「できるじゃない♡」

「……………」

「……………」

「……………」

「何、「コレ」?(笑)」

「勃つても全然」

「大きくならない」

「じゃない♡」

「親指サイズのまま」

「んんんん…」

「通りでカルデアでも
誰にも手を出して
なかつたわけね…」

「おじんののじゃあ
女を満足させるなんて
夢のまた夢だもの」

「……………」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」



「ぶぶ…やっぱり踏み潰してしまおうかしら♡」
「どうせ使い道ないでしょっぴりコレ?」
「い…っ…メルト…!!!」

「だって貴方人類のために闘ってるんですよ?」
「こんな劣等遺伝子ここで排除したほうがいい人類のためじゃない♡ね?」
「ほら♡ほらっ♡」

「んっ♡」

「んっ…痛…っ♡」
「め、メルト、やめ…っ♡」
「やめてほしかったら…わかつてるわね?」

「うっ♡ぐう」
「マツ豚が主人に媚びれる方法はひとつだけよ♡ほら」

「んっ♡」
「んっ♡」
「んっ♡」

「んっ♡」



「早く射精しなさいっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」



「うう……♡♡♡」

「はいお疲れさま♡♡♡」

射精………ん？

射精したわよね？

ものすごく量

少ないけど……

しかもこんな

微量精子のくせに

私の足を汚すなんて……

マスターじゃなかったら

溶かしてるところよ」

「はあ……はあ……

め、メルト……」

うん♡
うん♡

ん♡

うん♡

と♡

せ♡

せ♡
うん♡

「まあいいわ♡
一応は射精せた
のだし……
ご褒美をあげる」

「私とご主人様の
セックス♡
特別に特等席で
見せてあげるわ♡
好きなんでしょ？
そういうの♡」

「……」

「ちなみにジャンヌオルタ
では何回射精したの？」

「え……ふ……5回……」

「そう。じゃあ私では
10回射精しなさい♡」

「え……!?」

「当たり前でしょう？
他の女でオナニーした
だけで処刑ものなのに…
回数でも負けるなんて
とても許せないわ♡」

「それに貴方は10回
射精してやっつと
ご主人様の1回分
に届くかどうか…」

「それくらいならしなませ
鍛えてるじゃないか♡
ならならいっしょに♡」

「……………」

「頑張りなれ♡
このまま
私が手伝って
あげるから♡」

うん♡
うん♡

ん♡

うん♡

うん♡
うん♡

うん♡

「おま○こ
私の秘部」♡

「こんな機会でも
なければ貴方は一生
見ることもなかった
でしょうね♡」

お

お

お

ん♡

ト○ト○♡

お♡
お♡

お

お

「ご主人様に
感謝して
しつかり射精
するのより♡」
「う……」

「め、メルト…」

「なに？」

私とご主人様が
愛し合うところを
間近で見れるなんて
貴方にはもつたいない
おかずでしょう♡

「射精できないんで
言わせないわよ。
10回射精のノルマ
なんか楽勝よね♡」

「びび…」

トロ♡

グワ♡
グワ♡

「ただし私には
指二本触れては
ダメよ♡
貴方はそこで
見てるだけ」

「恋人(笑)は床に
つけたまま
動かさないこと♡」

「ダメち○ぽは
私が虐めて
あげるから♡
わかったわね？」

お

「さて、そろそろいいかな

メルトちゃん♡

こんな美味しそうな

おま○こ見せられたら

僕もう我慢できないよ♡」

「ええ、もちろんよ

ご主人様♡」

キョウ

ちゅ♡♡

ギンギン

く

ト○ン

グ♡グ♡

「ほら、

よく見なさい

マスター♡

貴方のは

似ても似つかない

本物ち○ぽ♡」

「く……」

「くすくす♡

もう思い知ってる

でしょうけど……♡

女を支配する側に

なりたければ

このち○ぽを

見習うことね♡」

「雑魚イジメ

も済ませて

私も準備完了

だし……♡」

「ひひ…♡
それじゃあえ〜と…
藤丸くん？」

「今からメルトちゃんも
いただくからね♡
よく見ておくんだよ」

「は、は〜…」

「梅」

「ちゅ♡♡♡

「ギンギン
ギンギン
〜」

「ん…♡」

「それじゃあ
いただきます〜」

「ト〜♡
〜♡」

「ぐ♡
ぐ♡

「お♡

「お♡





おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

「ひひ♡ありがとね♡
藤丸くん♡
メルトちゃんのおま○こガン突き
するの最高に
気持ちいいよ♡
マシユちゃんとは
また違った味わいだ♡」

くほっ
くほっ
くほっ

「ふっ♡
ふっ♡」

フェツ

フェツ

「え…な、なんでお礼なんか…」
「いやいや、
だって二人とも
キミが連れて
きてくれたんでしょ♡
こんな極上穴に
手をつけずにさ♡」

くほっ
くほっ

はっ♡♡

はっ♡♡

グワ♡
グワ♡

「それに
メルトちゃんの場合、
君を虐めてとろけた
ま○こを僕が
いただいでるわけ
だから♡」

「藤丸くんには
感謝しかないよ(笑)
ね♡メルトちゃん♡」

「ええっ♡そうね♡
いいダシになってくれて
ありがとう♡マスター♡」

「っ」



「う、う、う……っ♡」
「あは……っ♡」
「もう射精したの？
さっきはあれだけされて
やっと射精したのに……」
「本当に好きなのね
寝取られオナニー♡」
「量は相変わらずだけど……(笑)」

くほくほ

「寝取られオナニーは
よくないって
教わったんじゃない？
なかつたの？(笑)」
「ホントどうしようもない
マスター(笑)
マゾ豚ね貴方♡」

ほっ

フェツ

フェツ

はっ♡♡♡

はっ♡♡♡

「ち、ち、ちが……」

グワッ

「いいえ、
違わないわ♡
自分より強いオスに
サーヴァント奪われて
本当は悦んでるん
でしようっ♡♡♡」

…ツッ

「童貞じぶんが触れたことも
見たこともなかつたし
おま〇こが他人に
使われてるのが
イヤインでしょう♡
ねえ♡ほら♡
ほらあ♡♡」

おん



「ううう…うっ♡」
「ほくらまたイッた♡
ご主人様が1回射精す
間にもう2回目♡
情けない負け犬ね♡」

ぐぼっ

ぐぼっ

「ひひ♡
まあまあメルトちゃん
それくらいにしどいで
あげなよ♡
そろそろ僕も
射精すからさ♡」

ぐぼっ

フェツ

フェツ

は♡♡♡

は♡♡♡

…アッ♡

グワ♡
グワ♡

「ええ、ご主人様♡
…ほらマスター！
わかってるわね？
ご主人様に
感謝を込めて
もう1回よ♡」

「ご主人様が
本物の射精を
見せてくれる
貴方が
大好きな
瞬間に…♡」

「あゝ射精る
射精る♡」

「おん」

ん

おん

「おん」

おん

おん

おん

おん

おん

おん



「ふんふん...♡♡ふんふん...♡♡」

「おっほほ♡♡♡♡
気持ちいい♡♡♡♡」

「極上穴に腔内射精♡」

「んひ♡♡♡
ご主人様♡」

ドクドク

ビュルッ

ぶせ♡

「藤丸くんが床に精液
まき散らしてる前で
メルトちゃんど
遺伝子ませませ♡
これは優越感に
浸っちゃうな♡」

ビュルッ

ぶせ♡

どの

メルトとご主人様
の絆レベル：
70→100♡

♡♡♡♡♡

せ♡

「ご主人様のアツい
精液子宮で感じる♡♡
ステキ♡♡♡
ご主人様あ...♡♡♡」

「ごんな童貞より♡
ご主人様のほうが
10倍好き♡♡♡♡♡」

せ♡

せ♡

「はい7回目〜♡
ほらほら
どうしたの？
ペース落ちてるわよ
早漏のくせに♡
量もどんどん減ってるっ(笑)」

「め、メルト…
も…もう無理…っ」

「だめ♡
私は他の女みたいに
甘くないわよ♡」

「貴方のごと徹底的に
鍛えてあげるって
決めたんだから♡」
「っ…っ」



「いいから続けなさい♡
ほら、腰を浮かせてはだめよ？
ち○ぽと夕マは床にぴったり
擦りつけたまま上半身で
私たちを支えるの♡♡♡
床とセックスしながら
ご主人様の椅子になるー
こんな惨めなこと
ないでしょう♡」

「自分はオスとして
底辺だっけしてっから
自覚なさい♡」
「う……っぐ……っぐ」

「言っておくけどこれらも
全部貴方のためにして
あげてるのよ♡
わかってるわね？」
「そうそう♡
男は悔しさをバネに
成長するからね♡(笑)」

「ふひひ♡
いや〜ごめんね藤丸くん
重たいでしょ(笑)
まさかメルトちゃんか
ここまでやるとは…♡」

ズ
ズ
ズ

ぐほ♡

ぐほ♡

みみ

みみ

ニギ

ニギ

トロ♡

「はい8回目♥」

あと2回よ〜頑張って(笑)」

「あ〜あ〜」

キ〇タマ腫らして

かわいそうに(笑)

藤丸くん泣いてるよ

メルトちゃん♥」

「ふぐ…っ
メルト…♥
メルトお…っ」

「いいのよ、これくらいやらなくちゃ
効果ないんだから♥」

「だってほら見てご主人様♥
貴方が特濃精子で
私の子宮満たしてる間に
マスターが床に作った
水たまり♥」

「こんなシャバシャバで…
ホントは漏らしてるだけ
なんじゃないの?(笑)
私のマスターとして
こんなのは許せないわ♥」

「う〜ん、確かにこれは
ちよつとヒドイね(笑)
こんな薄いのを射精されたら
女のゴが可哀想だよ♥」

「うう…っ
ううう…っ」



ズ
ん

ぐほ

ぐほ

みみ

み

ニギッ

びや

ギ

「そっぴでしよう♡
だからこーやって私がい
思いつきり虐めてあげないっ♡
どうせ三倍に腫れて
ちようどいいくらいいの
大きさをんだから…
潰れるギリギリの力で…っ♡」

「あゝあ、大変だね藤丸くん♡
ま、こればかりは持って生まれた
ものだから仕方ないね」

「ぶっちやけオスの順列は
生まれでほぼ決まってるから♡
もうわかってるよね藤丸くん♡
キミがかたゝい床で
ち○ぽ虐められてる上で」

「ボクはメルトちゃんの
ぬちよぬちよ柔らかか
おま○こ好き放題
使えるわけ♡」

「上質なメス穴使えるのは
選ばれたオスの特権
だからね♡」

みみ

みみ

「ほらまた射精すよ
藤丸くん♡
準備はいいかな？(笑)
キミのメルトちゃんに
また腔内射精
キメるよおっ♡」

「ほらわかってるわね
マスターっ♡
今度こそきつちり
射精しないっこのまま潰」

「ぐっぐっぐっ…っ♡」



「おほいっ♡♡♡」

ん
お
お

ポ

ク
ッ

ズ
ズ
ツ

せ

ズ

ん!!

ん
ん
ん

ん





お

ん

ん!!

ん

お

「ん~~~~♡♡♡
イイ~~~~♡♡♡
メルトちゃんのお穴
何度射精しても
イイ~~~~♡♡♡」

「このち○ぽを
射精させる
ためだけにある
ような穴~~~~♡♡♡
名器すぎる~~~~♡♡♡」

「おっほ♡♡♡
おっほ♡♡♡」

あ~~~~♡♡♡

「ああ~~~~♡♡♡
吸われる~~~~♡♡♡
ドロドロま○ぽ
溶けたち○ぽ
搾られる~~~~♡♡♡」

あ~~~~♡♡♡

「お♡♡♡
お♡♡♡
お~~~~♡♡♡」

ズ
ズ
ズ

ぞう

ゼ
ゼ
ゼ
ら
ら
ら
ッ
ッ

ゼ
ゼ
ゼ
ら
ら
ら
ッ
ッ

ぞう

「あ???

が

「あああ~~~~♡♡♡
「あああ~~~~♡♡♡
「あああ~~~~♡♡♡」

ド

が

「ひひひ~~~~♡♡♡
パンパンの子宮で貪欲に
飲み込んで~~~~♡♡♡
この細い身体はどこに
入ってるのかな~~~~♡♡♡」

あ~~~~♡♡♡

〇〇



「ふうううううううう♡♡♡
う♡ふうううううう♡♡♡
あゝまだ射精てる♡

.....あれ?

藤丸くんどうかした?(笑)」

「え?.....ああ.....
もしかして.....」

「.....ッ
.....!!」

「ごめんなさいね♡
私、ご主人様とするときは
色々感じやすいものだから
つい力が入ってしまっ♡」

「勢いあまって
潰してしまった
かしら?(笑)」

ゼッ
ズッ
ド
ぐちゃぐちゃ

「でもまあ別にいいわよね?
どうせ使い道のないモノ
なんだからひとつくらいいら
タマひとつのほうがいい
精力増すわよきこと(笑)」

「.....ッッ!」

「……ふふ♡
もう半分気絶してるわね。
それでも椅子の姿勢を
保ったのは褒めてあげる♡」

「ホントホント♡
根性はすごいなく藤丸くん(笑)」

「それに免じてノルマの
あと1回はオマケして
あげるわ♡」

「最後の射精は貴方の
2回分はあったみたいだし？
それでも少ないけど(笑)
タマひとつ犠牲にした
かいがあったわね♡」



ズジュ
ズジュ
ズジュ

ズジュ
ズジュ
ズジュ

「それじゃあ今回は
これくらいにしておいて
あげようかしら♡
私とご主人様はまだまだ
愉しむけれど……」

「貴方は早く
保健室？行った方が
いいわよ(笑)」

「ぶひひ、お大事にね、
藤丸くん♡」

「……………」

「……気がつきましたか」

「……………」

「……………」



「……気がつきましたか」

「……」

ほろろ



「……気がつきましたか」

「ん……」

んんん



「お、婦長……」

「学園の保健室です。
私は養護教諭として
潜入しているので…
どんな場所でも
要治療患者は
いますから」

おち…

「保健室の先生…
はは、
婦長らしいな…」

「……ふむ。
どうやら体調はそれほど
悪くないようです。ね。
しかし聞きましたよ。
また随分無理をしたと…」

「いしも言いつつなわけじやう。貴方に何かあれば私は——」

おち...

「うん…
ごめん、婦長」
「……まあいざいざじやう。
貴方はしばらく休んでいなむら」

婦長との
絆レベル：10

「え、でも…」

「いけません。
貴方には明らかに
休養が必要です。
聞き分けなさい」

「……うん
わかったよ」

「……………」
（婦長……婦長も今は
いつもと変わらない
ように感じる……）

（今は二人だから……？
……もしかして……
婦長は……）

おち……♡

「ねえ、婦長……」

「おち……」

「……………」
（婦長……婦長も今は
いつもと変わらない
ように感じる……）

（今は二人だから……？
……もしかして……
婦長は……）

「ねえ、婦長……」

「おっ……」

「せんせ〜♡」

「……………」
すみません、患者……
生徒が来たようです」

「あ……」

「あ、いたいた先生♡
何してんの？」

「……患者の治療ですが。
何か御用ですか？
貴方には治療が必要な
ようには見えませんが……」

「またですか。
自分で清潔に保つよう
注意しなさいと言っ
たでしょう」

（え……!?
この生徒……
今なんて……!）

「いやそれがささ
またチンカスが
溜まつちやつてさ♡」

また先生に
綺麗に消毒して
ほしいな♡って♡」

ぬ♡

ぬ♡

みち♡
みち♡

（ふうふう）
また……？
この感じ……

「今はマスターの
治療中です。
緊急でないなら
後に——」

「いやいや！
今回はマジ
ヤバいんだって♡
緊急緊急（笑）」

ぬ

ぬ

みちみち♡
みちみち♡

「あー——」



「ちよっと
嗅いでみて」

おま

ほろん

おま

大好き

おま

ちよっと

「ね〜ひひひっ♡
ニオイヤバいっしょよ？
先生に消毒してもらおうと
思っでず〜〜〜と
洗わなかつたらこんなん
なつちやつた♡」

子カ

子カ

ストン
ストン
ストン

「おっ♡ほ♡
た…確かにっ♡
これは…
緊急ですね♡」

ねちねち♡

せう

せう

「マスターの
治療より♡
優先度を上げて
処置せざるを
得ません…っ♡」

「そうでしょそうでしょ♡
そんなヤツほっといでさ〜
俺のチンカス掃除
してくれるよね？」

婦長と生徒の
絆レベル：30♡

子か

「きつと味もスゴイよ♡先生好きでしょ？この中に詰まってる…」

子か

ストン♡ストン♡ストン♡

「エッグいチンカスチーズ♡」
「ええ、わかりました…♡」

ねちねち

せう

せう

せう

「……すみませんがマスター、ベッドを譲ってください。貴方よりこちらの処置を先にしたいので♡」

「え……う、うん……」

婦長と生徒の絆レベル：30♡

「ふ、婦長…？
まさかソレ…」

「ええ、もちろん
くち
口腔で処置
します♥」

「男性器…特に
包莖ち○ぽ♥は
デリケートですから
当前かと思いますが…
それが何か？」

トスト
トスト

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

せつせつ

うます
うます

「S.S&…」

「せんせ〜早く早く♡
ち○ぽ痒いよお〜♡」

「慌ててはなりません。
ち○ぽにごべりついた
恥垢…チンカスは
しつこいですから…
まずはごうやって…」

「これだけ
チンカスとなると
唾液も相応量が
必要です…
まったく…
こんなに…
放つておくなんて
…っ♡♡♡」

「ごめん先生え〜」

だだだ
♡♡♡

トホトホ
♡♡♡

んあ
♡♡♡
スイトム
♡♡♡

「口の中で温めた
唾液を皮の中に垂らして
十分にふやかします♡」

「おほっ♡
先生の唾液
あつたけえ〜♡」

「それからいじりついで
皮の中でよお〜〜く
混ぜ合わせれば!♡」

「んひよひよっ♡」

「貴方も二応は
男性なのでですから決して
他人事では……いえ、
貴方の場合なおさら
覚えておくべきでしょう。
同じ包茎でも
童貞卒業資格のない者は
自分で処置しなければ
なりませんから」

「う……うん……」

「おっ♡おっ♡おっ♡
先生の手術キ
気持ちいい♡♡♡」

ぐっぢぢぢ

「チンカスが掃除
しやすい状態に
変わっていきませす♡
わかりましたか?
マスター」

「え? お…俺…?」

ぐっぢぢぢ
ぢぢぢ
ぢぢぢ

「手コキではありません。
これは医療行為なので♡」

「むほっ♡♡♡」

お♡♡♡

「うん♡♡」

「私の唾液とブレンド
されてヒドイ悪臭
でしょう♡♡♡」
こうなれば容易に
舌でこそぎ落す
ことができます
ので♡♡♡♡♡」

「うほほ♡早く♡早く♡
俺のチンカス食べて
先生♡♡♡」

「ええ♡
それではいただき…
もっ♡♡」

キョッ♡

ん♡ちよお♡

ねたあ♡

ッ♡

ん♡

あ♡あ♡
ん♡ん♡

「見てくださいマスター♡
これが食べ♡…♡♡
…♡いえ、処置しやすく
なったチンカスです♡」

「うぐ…♡」
（す、すごいニオイが
…♡まで…♡♡♡）

「治療を始めます♡♡」



あやあや

あやあや

あやあや

あやあや

あやあや

あやあや

「んおっっっ」

ぬちゅんっ

おっっっっ

おっっっっ

ぬちゅんっ



「あつ♡ああ〜♡
さすが先生え
すげ〜舌使い…♡
もう射精ちやつたあ〜」

「んぷ…♡♡♡
ん…♡♡♡」

「ふあい…♡
わかりまひたあ♡♡」

「おほ♡お♡お〜♡
そうそう♡
尿道に残ってるのも
全部吸い上げて
ねえ〜♡♡」

ブル

ブル

ブル

どくろ

おせツ

どくろ

「あー！
まだ飲み込んじやダメだよ！
チンカスも精液も
お口に溜めてねえ〜♡
先生には健康チエツクも
してほしいからさつ♡」

どくろ
ブル

ちゅっほん♡

♡ちゅっほん♡

「ちゅっほん♡」



「はい先生
あ〜ん♡」

ぬる...

ほま
かか

ゴホ

ほり
おほ

「ん...ん」

「せっつかくだから
ソイツにも
見せてやろて(笑)」

あ
ん
ん
ん

サ
ン

「うひゃ〜くっせ〜♡」

「うぐ〜♡」

（嗅いだことならいくらも強烈なニオイ……っ）

これが……
婦長の口から……）

はー

はー

「口の奥に溜まっているのが精液で舌に乗っつてるのがチンカスだね♡器用だね〜（笑）おかげでち○ぽはぴっつかぴか♡さすが保健の先生だね♡」

「な、なんでこれを俺に……」

はー
はー

ぬる……

ほほか

ゴボ

はー
はー

「え？
だつて羨ましそうに見てたから……
見たくなかった？」

「……………」

「まあいいや(笑)
それじゃあ先生
健康チエツク
お願い♡」

「あい♡
しょうち
しまひた♡」

はい♡

ぬる...

「け、健康チエツクつて...♡」
「え？」

ほまか

ゴホ

はい♡

あ

「ま...」

「口に射精した精液と
チンカスの味で健康か
見てもらうやつだけど...
やってもらったこと
ないの？」
「...あ、そういや
童貞卒業資格ないん
だっけ(笑)」

ゴホ

「あ、味つて...
それじゃあ婦長は
このままコレを
食べ...」

「ま...」

「ほれれは...♡」



あははははは

「うめ」

2. 2. 2.

ちゅ

「うめ」



んはあ

んはあ

んはあ

んはあ

んはあ

んはあ

んはあ

「お、おえ……」

「でも先生よくそんなの食えるね、彼なんかもうええずいちやつてるのに(笑)」

「げぷ……っ♡」

そ……それは仕方ありません♡

私は女性なのでこの三オイや味が好物ですが……っ♡♡」

はい♡

「……も……この状況で勃起しているようではオスとしての差は歴然♡それどころか寝取られ依存の兆候が……」

「ふ……ん♡あ、そうだ先生」

「は？」

はい♡

せせ

「マスターは三応生物学的には男性オスに分類されるので本能的に嫌悪を感じたのでしょっ♡」
「……」

「マスターは三応」



「はいでだしもう一発
抜いていらっやろ」

ほっほっほ

アッ

ズン

アッ

アッ

「?!」

「おっほ♡」

「先生ま〇〇いアメンアメン♡」

「ちよ、ちよつと…」

「いきなり何を」

「おっ♡あ…慌てないでください♡」

「これも医療行為ですから♡」

「男子生徒が健全に過ごせるようにと」

「性欲処理をするのも」

「養護教諭の職務です…♡」

「ひひ、そういうこと♡
まあもちろん童貞卒業資格がないと
できないけどね(笑)」

「……………」

ズボ

おっ♡

せせ

「それより心配
なのは貴方…♡
先ほどよりますます
興奮している様子
ではないですか♡」

「先生の上の口も
下の口も両方
味わえないなんて
可哀想だな(笑)」

「やはり貴方には
寝取られ依存の
疑いが♡
ついでに検査を
するのでこちらに
来てください」

「え？
検査…？」

「うひょつ♡ほ♡ふほつ♡きもちい♡先生の性処理穴♡最高お♡チンカス掃除で準備万端じゃん♡」

「ふ、婦長これは…!?」
「もちろんん検査♡です♡先ほども言った通り貴方には寝取られ依存の兆候が見られますので…」

びゅん

はっ

「こちらの生徒の性欲処理を利用して♡ん♡ふう…♡貴方の症状を見極めます♡貴方は何もせず…」

「本当にナニもしてはいけませんよ？手はシーツから決して離さないこと♡わかりましたか？」
「わ、わかった…」



「ふっふっふっ♡
ふうっふうっ♡」

せせせ

「う……」
（ふ、婦長が息するたびに
口から精液のニオイが……）

「ふっふっふっ♡
ふうっふうっ♡」

ばっばっ

「ふむ……っ♡
やはり先ほどよりさらに
興奮していますね♡
自分が長い時間をかけて絆を深めた
サーヴァントが性処理に使われて……♡」

はっはっ

「そのうえ自分は見ているしかできません
オスとして圧倒的に劣っているところ
自覚させられてる……♡
この状況で勃起するのは
非常によくありません……っ♡」

「そ、それは……」

「私の口から他人の精液臭が
するのがイイのですか？
それでは……これは
どうでしょうっ♡」

ぐわんぐわん
ぷちゅぷちゅ

ぼん

「マロイ」

ぷちゅぷちゅ

「どうれす？
別の男性のチンカスと
精液を口いっぱいに
ほおばって食した
ばかりの口内……っ♡♡」

「うわ
きたね〜(笑)」

「他人のち○ぽと間接キス(笑)
絶対嫌だわ〜」
「ひどい味れしよ〜♡
男性の貴方には特に……っ♡♡」

ちゅぽ

ちゅぽ

(婦長の舌から
伝わってくる……っ
このエグみが……
あ、あの男の……!!)

「うひひっ♡締まる締まる♡
先生ってばソイツとキス
してから締めよすぎっ♡
こんなんすぐ射精ちゃうよ♡」

ばっん♡

「……だぞうです♡
貴方はどうしますか？」

ハ

ハ

ハ

ハ

「おお〜射精る♡
射精るう〜♡」

ちゅほ♡

ちゅほ♡

「この生徒にはこのまま
膣内に射精してもらい
ます♡♡
そういう決まりですので…」

「貴方も…んちゅ♡
このまま…♡」

「ん…♡」

「おほおほ」

「おほおほ」

「おほおほ」

「おほおほ」

「おほおほ」

「おほおほ」

「おほおほ」



「貴方は……っ♡しゅ♡
重度の寝取られ依存だと
診断できます……っ♡♡♡」

「この穴をいつでも
自由に使える学校生活♡
最高すぎるだろ♡♡♡」

「ふっ……♡♡♡
ぶっ……♡♡♡」

ゼゼ
ジュジュ
ジュジュ

しゅい

せろっ

せろっ

ズチゅん

「はあく射精るう♡
性処理用のエロ穴に
搾られるう♡♡♡」

「おっ♡♡♡ぷお……っ♡
や♡やはり……っ♡♡♡」

カム

カム

「しかも全く勢いのない
漏らすような射精……♡
典型的な寝取られマゾ
の症状です♡」

「ふっ……♡♡♡」

「自分でもわかるでしょう♡
私に促されるままに
手も触れることなく
射精してしまっただのです
から……っ♡♡♡」

「ぶあ…悔しいですか？
しかし治療はまず自分の病状を
認めるところからです♡
とりあえずは睾丸を片方潰されて
射精機能が（二応は）残っていた
だけでよしとしましょう♡」

「ふ…ふ…ふ…」

ゼム
ゼム

「え、そうなの？
カワイソ〜（笑）
あくまで射精る♡」

「この特異点の修正にはまだ
かなりの時間がかかるでしょうから…
その期間に少しずつ治療していきます♡」

「治療の間自慰行為は
私が適切に管理しますので…
まずはそのお漏らし癖から
矯正しなければなりません♡」

カ
カ

「射精は多くても10日に1回！
その他の日は寸止めオナニーを
必ず10回以上行うことー
わかりましたね？」

ヌ
ヌ

「ー」

「うわ〜キツう(笑)
大変だね〜寝取られ依存は
まあ頑張つて?
オナネタならいっぱい
提供するからさ♡」

婦長と生徒の
絆レベル：
30→45♡

ゼ
ル
ニ
ン
ジ
ン

「俺は明日も明後日もこの穴
た〜つぷり使う予定だから
ね〜先生♡」

「ええ♡協力いただけると助かります♡」

「まあ最も…」の特異点では
どこに行つても勃起材料には
困らないでしょう♡
その状況で射精しないこと
こそ意味があります♡」

「かなり苦勞するかと
思いますが…
頑張つてくださいな、
マスター♡」

ヌ
ト

「ん…ん…」

「うわ〜キツう(笑)
大変だね〜寝取られ依存は
まあ頑張つて?」
オナネタならいっぱい
提供するからささ♡」

婦長と生徒の
絆レベル：
30→45♡

ゼ
ジュ
ル
ニ
ン
ゼ
ジュ
ル
ニ
ン

「俺は明日も明後日もこの穴
た〜つぶり使う予定だから♡
ね〜先生♡」

「ええ♡協力いただけると助かります♡」

「まあ最も…この特異点では
どこに行つても勃起材料には
困らないでしょう♡」
その状況で射精しないことに
こそ意味があります♡」

「かなり苦勞するかと
思いますが…
頑張つてくださいな、
マスター♡」

ヌ
ト

「ん…ん…」

「うわ〜キツう(笑)
大変だね〜寝取られ依存は
まあ頑張つて?
オナネタならいっぱい
提供するからさ♡」

婦長と生徒の
絆レベル：
30→45♡

ゼユル
ゼユル

「俺は明日も明後日もこの穴
た〜つぷり使う予定だから♡
ね〜先生♡」

「ええ♡協力いただけると助かります♡」

「まあ最も…この特異点では
どこに行つても勃起材料には
困らないでしょう♡
その状況で射精しないこと
こそ意味があります♡」

「かなり苦勞するかと
思いますが…
頑張つてくださいな、
マスター♡」

ヌト

「ん…ん…」

「どうしたんですか先輩
ほーっとして」

「あ……ん……あ」

ほーっ……

「大人しいと思ったら……
なに？」

「貴方また意識を
どこかへやっていたの？」

「メルト……」

「どうしたんですか先輩
ぼーっとして」

「あ……んんん……」

ぼー……

「大人しいと思ったら……
なに？
貴方また意識を
どこかへやっていたの？」

「メルト……」

「どうしたんですか先輩
ぼーっとして」

「あ……」

ぼー……

「大人しいと思ったら……
なに？
貴方また意識を
どこかへやっていたの？」

「メルト……」

「……………ごめん、何か夢を見てみたいで…」

「ふん、お気楽なこと。……でもあんまり幸せな夢じゃなかったみたいね？」

「ええ、辛そうにしてみました。大丈夫ですか、先輩」

「……うん」

「心なしか顔色もよくないです。無理はなさらないでくださいね？」

「本当よ。貴方に何かあったら私たちが困るわ」

「あ——」

「ありがとう二人とも。本当にもう大丈夫だから」

「よかった。
なら——行きますよ」

「マッシュ」

マッシュとの
絆レベル：5

「ほら、シヤキツとなさい。
貴方にはマスターとして
やらなければならぬ
仕事があるでしょう？」

「メルト」

メルトとの
絆レベル：10

「……うん、わかった。
みんなで協力して、
早くこの特異点を
修正し——」



「よ……ら……!?」

??

ぽ

ちゅちゅちゅちゅ

て♡

「んぽお~~~~♡
よく育つたねえ
僕のボテ腹ちやん
たち♡」

「愛してるよお~~~~
二人ともお~~~~♡
ちゅっ♡ちゅっ」



「え……？え……？」

ま……マシユ……？メルト……？
そ……そのお腹は……？
??

「お腹？」

私たちのお腹が
どうかしました？」

「な、なんで……」

「は……」

「なんでそんな……大きく……」

ちゅちゅちゅちゅ

ぽゅぽゅ

「なんで……
そんなの妊娠したからに
決まってるじゃないですか
ねえメルトさん」

「ええ、その通りよ
女性のお腹が膨らむ
理由なんて他にないわ」

みちゅ

ト

「……童貞でも
それくらいわかる
でしょ？」

「はい……」の特異点に来て
早10ヶ月……ごく自然なこと
だと思えますけど……♡」

「本当に大丈夫ですか、
先輩？」

「じゅ……!?!
え……!?!」

「そっつかそっつか、

もう臨月十ヶ月から♡♡

時が経つのは早いね♡♡♡」

ちゅちゅちゅちゅ

ぽちゅ♡

「私、きちんと報告もしましたよね？
検査の結果おじさまの子だったんで
産むことにしました♡」

「私、クラスメイトの
方々とも毎朝たくさん
ご挨拶してたのに……」

「え……!?!」

みちゅ♡

ト♡

「やっぱりおじさまは
スゴイです♡って一緒に
盛り上がったじゃないですか」

「私の場合は検査するまでも
なかつたわ♡
だって私が身体を許すのは
ご主人様だけだもの♡」

「ほら、見て「J」の
バランスの崩れた
みつともない身体♡」

「完璧な私の身体を簡単に
こんなにしてしまつなんて…
さすがご主人様でしょう♡」

ちゅちゅ♡

ぽゅ♡

「はあ？
この特異点ではみんな
受肉してるんだから
サーヴァントだろうと
子作りをしたら妊娠する
のが当たり前じゃない♡」

「な……だ、だって
メルトは……!？」

みちゅ♡

ト♡

「……呆れた。
もしかして気づいて
なかつたの?(笑)」

「……!!!」

「あ、もしかして…先輩だったらまだ半分寝ぼけていらつしやうますか〜」

「ダメですよおっ！おじさまを待たせているんですからいい加減目を覚まして準備をしてくださいなごっ！」

♡♡♡
ふふふ

♡♡♡
ふふふ

♡♡♡
ちゅちゅちゅ

メルトとご主人様の絆レベル：1000♡

マシユとおじさまの絆レベル：1000♡

「じゅ、準備……？」
「まったく、それすら忘れたの？ 私たちが今から出産するから♡」

「貴方はそれを応援するんでしょっ！♡」

♡♡♡
トトト

「自分はマスターとして
それくらいいしがかできないからって...
貴方が言い出したんじやない」

「しっかりしてよね...
そのために何ヶ月もオナ禁
してきたんでしよう(笑)」

「あ.....え...」
「うひひひひ」
「元気に蹴ってる蹴ってる」

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

メルトとご主人様の
絆レベル：1000♡

マシュとおじさまの
絆レベル：1000♡

「は〜い、パパでちゅよ〜♡
今外に出してあげまぢゅ
からね〜♡♡」
「そうですね(笑)
それが先輩の
お仕事でしょう。
ほら早くこちらに来て...」

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

「短小童貞ちのほ
出してくだらな〜♡」

「...ん...ん...」

「さて、それじゃあ藤丸くんの準備もできたところはいよいよ出産の前に♡」

「んる♡」

ぽちゅの♡

「.....」

「ん...♡」

「臨月のボテズリ楽しんでやおっかな♡」



ぽちゅの♡

ぽちゅの♡

ぽちゅの♡

ぽちゅの♡

「もうおごじやあつたらあ…
ダメなんですすよあ？
妊婦さんには
優しくしないわあ」

「本当…遊びで
こんなにした
お腹をさらに
玩具にするなんて
なんてひどいパパ
なのかしらあ」

ぽちゅの

「ひひ、ごめんねえ
二人ともあ」

「でも二人のエロら
ボテ腹見てたら
我慢できなくてさああ
ついやりたく
なつちやつたん
だよねあ」

ぽちゅの

ぽちゅの

ぽちゅの

ぽちゅの

ぽちゅの

ぽちゅの

「あゝ♥中身がみつちり詰まったボテ腹ふたつ♥ぎゅ〜つと密着させてち○ぽ挟むの最高お〜♥カタいような柔らかいような不思議な感触う〜♥」

「あん♥おじさまあ♥そんなに激しくしたら赤ちゃんびっくりしちやいますよお〜♥」

ほぢぢゅ

「.....」

「ひひ、平気平気♥散々ヤツてきたけどボテ腹って意外と丈夫なんだよ♥どうせもう産まれるんだし景気付けてことで♥」

「ふふ...っ♥まあ孕ませた女を自由に使うのも強いオスの特権だけ〜♥」

ほぢぢゅ

ほぢぢゅ

せせ

ズキッ

ズキッ

挿チツツ

挿チツツ

ズキッ

「それにほらあ…
産んじやったら
また数ヶ月は
ポテズリできない
しさあ…っ♡」

「あ…っ♡
おじさま
それって…♡」

「ふふ、今の聞いた？
マスター♡
ご主人様だったら
もう二人目作る気
満々みたい♡
気の早いことね♡」

「え……」

「まあそういう
ことになるかな♡
もちろん二人が
よかったらだけど♡」

「どうでしょう先輩♡
おじさまから二人目の
予約されちゃいました♡
…え？いいですよね？
その分特異点の修正が
先延ばしになるだけの
ことですし…♡」

「い、いや…でも…」
「ナニ言ってるの？
マスターなんて
関係ないじゃない♡
短小ち○ぽの童貞が
子作りに関して何を
知ってるって言うの？」

「孕むの」
「弱いオスの許可なんて
いらナイわ♡」

「あ、それも
そうでしたね(笑)」
「う……」
「♡ひひひ♡」



「ふひよっ♡」

「あん♡」

「ちよっ♡」

「チュル♡」

「ん♡」

「せっ♡」

「せっ♡」

「密着ボテ腹に
直射精い♡♡」

「ふひひい♡♡♡
イイこの圧っ♡♡♡
射精促されるう♡♡」

「ん♡」

「うわー!」



「それは、ご主人様とセックスする前！本物のオスを知る前の話でしょうか？そんな順位、ご主人様のち○ぽを受け入れた初日に書き換えられてるわ！今ではそうね…マスターの100倍好きよ、ご主人様♡」

「う…ふ、二人とも…」
「実は私も…いえ、私の感覚ではもう少し…200倍くらいでしょうか…先輩には申し訳ないですけど…やはり男性として差があり過ぎるというか…(笑)」

「そっかそっか♡ まあ仕方ないよね、身体の繋がりがりつて強いから♡ 藤丸くんがながるい時間かけて築いてきた心の繋がりがりなんかよりよっぽどね…♡」

「女のコは子宮で恋しちやう生き物だからさあ♡ きつと他のコも似たり寄ったりじゃないかな♡ ほら、例えば…向こうにいるあのコとかも…」



※ご注意※
このあと歯なし描写があります。
(ファイルNo.【e103】)

血は出ませんが
苦手な方はご注意ください。

「お、オルタ……！」

みみぢぢっ

チャチャ

ぐほ
ぐほ

「さすがに喉ま〇こを
使われてる最中に
会話は難しいだろ(笑)
呼吸もできてないのに♡」

おおっ

おっ

「お、藤丸。
相変わらずオナ禁に
励んでるみたいだな(笑)」

……ん？
ジャンヌに何か用か？
ちよつと待ってくれよ、
もうすぐ使い終わるからな♡」

たむん

うお..

で



「そ、それ……っ」

みみぢぢっ
みみぢぢっ

「ん？
妊娠のことか？」

ぐほ
ぐほ

「ああ、それとも
タトウーのことか？
これは俺がこいつを
完全支配した証に
入れてやったんだ♡」

えお
えお

チャチャ
チャ

「ジャンヌの白い肌に
一生消えない落書き
するのは楽しかった
ぞお♡
：そうだ、お前も今度
やってみるか？
まだ大分スペースが
余ってるし(笑)」

「ピアスも
似合ってるだろ♡
これも俺が
空けてやったんだ♡」

「……っ」

うお

えお
えお

「もちろん俺が
孕ませてやったんだ♡

ジャンヌとは授業以外でも
ハメまくったからな♡

もうすっかり俺専用の肉奴隷だ♡
妊娠以上の証明はないだろ？」
たにゅん
たにゅん

で
ポ

「特に一番
気に入ってる
のはこれだ♡」

ぐほぐほ

がが
ちゅちゅ

「あ、勘違いするなよ？
これ全部ジャンヌも
同意のうえでヤツた
ことだからな♡
まあそうなるよう
馴けたのは俺だが♡」

ばんばん

ばんばん

がが
ちゅちゅ

ほぐほぐ

「家畜みたいで
カワイイ
不様だろお♡」

「う…!!」

「授業でも教えたたる、
セックスで女を
徹底的に支配する
ことが大事なんだ♡」

「しかしこの十ヶ月で随分差がついたもんだな♡」

「え……？」

「考えてもみる、」

「お前が落第童貞ち○ぽで寸止めオナニーしてる間にジヤンヌがどうなったのか♡」

ほくほく

ががちゅっ

「妊娠やタトウーだけじゃないぞ？
実はこの口ま○こにも特別な改造を……♡」

「……♡」

「……」

ズンズン

「ジヤンヌの穴はどこも」

「一級品でなあ♡
虐めれば虐めるほど育つんだ♡」

「こんなに優秀なマソ穴俺も初めてだからつい張り切ってしまった♡」

ぽんぽん

ががちゅっ

「ひひひひっ♡」

「あゝ射精るっ♡
射精るぞおゝジヤンヌっ♡♡」



「な…な…」

あ

「な…なん…」

「そのほうが俺が
気持ちいいからな
口の中でち○ぽを
思いきり暴れさせても
歯は当たらんじ…
当たり前だが(笑)」

「ひひ…っ♡
これ見えるか藤丸♡
ジャンヌの口内…」

と

ぢゃあー♡

と

「歯を二本残らず
抜いてやったんだ♡
綺麗だろ」

ア

「歯茎でち○ぽを
甘噛みさせると
またイイんだなあ
これが♡
どうだ、最高だろ
藤丸♡」

「あ…う…っ」

「えぽっ♡えぽっ♡
えぽっ♡えぽっ♡」

「ふ、婦長……っ」

「あ、藤丸くん♡
どうしたの？
先生に何か用？」

ばちゅ

ばちゅ

ぎゅあらん

たんたん

「童貞の用事なんかより
俺らの性欲処理が優先
なのわかつてるよな？」

「ちよつと、
そんな言い方
可哀想だよ」

ぐん

んちゅ

んちゅ

んちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

「タイミング悪いなあ(笑)
ちよつと待つてるよ
先生いま喋れないから」

ぐん

せゅ

「いくら事実でも
もっとオブラートに
包まなきゃ(笑)」

「……」

「ごめんね、藤丸くん
先生のポテ腹でも
見て元気出して♡」

「ふ…婦長まで…」

「いつ見ても
エロいよね♡
母乳まで出るように
なつちやつてさ♡
男子生徒みんな
協力して孕ませた
かいがあつたよ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「……!?
み、みんな…?」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「当たり前だろ、
先生はみんなの
共有オナホ
なんだから♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「つまりお前以外の
男子生徒は全員
穴兄弟ってこと♡」

「この学園で先生の穴
使ったことないのって
童貞卒業資格がない
お前くらいだろ(笑)」

「えっぽっ♡
えっぽっ♡
えっぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「んぽっ♡
んぽっ♡
んぽっ♡」

「.....」

「これがまた濃厚で甘くて美味しいんだ♡

あーそうだ
藤丸くんも飲んでみる？」

「おっ♡♡♡
ぽっ♡♡♡」

「はちゅっ♡」

「はちゅっ♡」

「ぎゅん♡」

「おっ♡♡♡
おっ♡♡♡
ぽっ♡♡♡」

「はは、お前も結局童貞のことバカにしてんじゃん(笑)」

「.....」

「いやいや僕は同情してんだよ♡
だってそうじゃん？
ち○ぽがちゅちゅい
ぽっかりに母乳も
飲めなければいっせん

「んっ♡」

「はちゅっ♡」

「はちゅっ♡」

「はちゅっ♡」

「はちゅっ♡」

「はちゅっ♡」

「.....あーでもダメか♡
先生の母乳は大人の味だから
童貞にはまだ早いね(笑)」

「おっ♡♡♡」

「おっ♡♡♡
ぽっ♡♡♡」

「先生の穴使って自由に射精もできないなんてさ♡
.....ひひっ
こんな風にい.....っ」

「らちよら——」

「あむっ♡♡♡」

「おっほ♡
イイ飲みっぷり
だね〜先生♡」
「さすが先生♡
ほらほら〜
イツキ♡
イツキ♡」

あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡

あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡
あむっ♡♡♡

あむっ♡

あむっ♡

あむっ♡





ムンムン〜

アタシは
甘い
お菓子
が好き
なの
よ

「あ〜〜」
「あ〜〜」

ムンムン〜

グセグセ

グセグセ
グセグセ

ムンムン〜
ムンムン〜

「ふ……ちよ……」

「残念だったね〜藤丸くん♡
先生つてばもうキミのこと
なんかどうでもいいみたい(笑)」

「んはあ〜♡」

「まあこんな腹に
なった時点でねえ〜♡
特異点?が
どうのこうのつて
キミとの約束より
出産子育てが優先
つてことでしょ♡」

わあ

婦長と男子生徒(藤丸以外)
の絆レベル：1000♡

「まあ先生も
この学園で色んな
男子生徒とセックス
しまくつて：
お前がいかに
低レベルなオスか
わかっただちやったん
じゃね〜の?(笑)」

「だろっね〜
先生みたいなイイ女
が傍にいたのに
ずつと手を出して
なかつたとか
ダメダメすぎ(笑)」

「はあ〜♡」

ヌート

「まあそんな
わけだから…
藤丸くんは
せいぜい
先生に言われた
オナ禁
頑張らなよ♡
無駄だろっけど(笑)」

「はあ〜♡」

も

「はあ〜♡」



アッ!

アッ!

アッ!

アッ!

「お♥おかえり〜藤丸くん♥
他のみんなの様子は
どうだった…? つて
聞くまでもないか♥」

「ね、言った通り
だったでしょ?
女のコは本能的に
強いオスに惹かれる
モノだからさ♥
残念だったね〜♥」

ハハ
チヂ

ゴッ

ゴッ

「……」

「お♥お♥」

「お♥お♥」

「お♥お♥」

「おほ♥お♥お♥」
「お♥お♥お♥」
「お♥お♥」

「あっ♡もっ♡
もう帰って♡きたのわっ♡
ふふっ♡
情けない顔…っ♡」

「いかがでしたか？
皆さん幸せそうだったでしよう♡
先輩といた頃よりよっぽど♡
ふふっ♡」

「サーヴァント皆奪取され
てたの「何もでませぬ」
のこの「帰ってくるな…
ホントー」」

IAA
チヂ

ポッ
ポッ

「ふ、二人とも…」

「おっ♡
おかえりなさいっ♡
先輩っ♡
こんな格好で
失礼します♡」

「可哀想なマスター♡」

「可哀想な先輩♡」

「G……G」

「ひひっ♡あゝ
ちよつと待ってね？
いま破水させてるところ
だから♡」

「あつ♡」

「は、破水って…
そんな…強引に…」

「ち○ぽで子宮口を
こじ開けるだけ♡
簡単でしょ？
まあ藤丸くんの落第ち○ぽ
じゃ無理だけど…(笑)

三人とも出産は初めて
だから僕がしつかり
リードしてあげない
とね♡」

「くる♡
おしゅま♡」

「AAP
チヂチヂ♡」

「ゴッ
ゴッ」

「えっ♡
あゝ平気平気♡」

「えっ♡
あゝ平気平気♡
童貞じゃわから
なくて当然だけど
これくらい全然
普通だから♡」

「えっ♡
あゝ平気平気♡」

「それにほら、
せつかくだから
二人同時に出産
させたいじゃん？
だからこうして
重ねて交互に
ヤツてるわけ♡」



「お♡ひびひ…
破水来たね♡
マシユちゃん♡」

「…♡♡♡」

ハハハ♡
チン♡
ツツ♡

「あれあれ…?
どうしたのかな
メルトちゃん♡
マシユちゃんに
遅れを取るなんて
らしくないんじゃない？」

「あ♡♡」

お♡
お♡
お♡

「慌てないで♡
主人様♡♡♡」

お♡
お♡

「お♡♡私も♡
もう♡♡♡」





ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

「ふほ♡きたきた♡
よおろし偉いぞ二人とも♡
上手に破水できたね♡」

「あ♡ほ♡ほ♡うん♡」

「ありがとう」

「うわっまわん…♡」

グシッ
チャッ
Pyッ

「三人の羊水温かくて
気持ちいいよ♡」

「ま、マッシュ…
メルト…っ」

グッ
グッ
グッ

グッ

グッ



「へん♡ん♡
んんんんん♡
ん♡ん♡
んんん…♡」

あ♡ん♡
あ♡ん♡
あ♡ん♡

あ♡ん♡
あ♡ん♡

「ひひ…♡
それじゃあ「仕事
終わったところで
僕も…っ♡」

「お…お」

ズブズブ

ド

ズ

ズブズブ

ズ

「お…お」

ズブズブ



「あ〜ダブル陣痛ま〇こ
たまんね〜っ♡
おらキメるメスどもっ♡
陣痛アクメキメる♡」

「な、なにこして…♡」

ズルンッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ズキ
ズキ
ズキ

「この独特のうねりがっ♡
膈壁が生きてるみたいだに
ち〇ぽに絡んでくるんだよ♡
名器でこれやられると
もうねえ…っ♡♡」

「しかも二人同時っ♡
射精中に抜き差しし
しながら交互に射精♡」

ぞろ

ぞろ

「なにって射精だよ♡
陣痛アクメキメてる
ま〇こはこの瞬間
しか味わえない
プレミアだからね♡
射精しとかなきゃ
もつたないよ♡」

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

「実は二人同時に
破水させたのは
コレが目的
だったりして♡」



「でも二人は……っ」

「あくあく心配し過ぎだったって(笑)
二人のこと大事なのはわかるけど
ちよつと過保護すぎるよ」
男なら女はもつと
雑に扱わなきゃ♡」

「藤丸くんはどうも
その辺りわかって
ないなあ(笑)
そんなだから寝取られ
ちゃうんだよ♡
だいたい出産なんか
ま○こからガキ
ひり出すだけ
なんだからさ♡」

ズムンッ
セ
ク
ク
ク

セ
ク
ク
ク
ク

ズキ

ズキ

ズキ

お
お
お

「女の」もその方が
嬉しいんだよ？
オスに虐められる
ように設計された
生き物だからね♡
授業で習ったでしょ？」

お
お
お

お
お
お

「女の」なら
誰でもできる
簡単なお仕事
でしょ(笑)
ほらっもつと
気楽に楽しんでっ♡」



「はあーっ♡はあーっ♡
ほ…ほら、先輩なりに
してるんですかつ♡」
ふん

「親指ちのぽ
ピクつかせて
ぼ…っとしてる
場合じゃない
ですよっ♡」

「え…っ」

「そ…っ♡そ…っよっ♡
貴方には貴方の仕事がある
でしよっ♡」

ふん

「ああ、そういえば
そうだったね(笑)
ひひ、それじゃあ
藤丸くん準備は
いいかな？」

「あ…」

たは

たは

たは

たは

たは

たは

たは

たは





ぐわぐわ

はてはて

みち

ズズズズ

ズズ

ハ

はははは

みちあ

グムグム

グムグム

「あつ♡あつ♡
わ…私もあつ♡」

「ふっ♡ぐう♡♡」

「降りてきたっ♡
でっかい塊いっ♡」

「ほほ♡

いいねキタね♡

二人同時出産♡

さすが僕が仕込んだ子♡

空気読めるね♡」

がっ

がっ

みちあ

あ

グムグム

グムグム

「ふっ♡
グムグム」

「ほらっ♡
メルトさんも
きましたよ
先輩っ♡」

「どうですかっ?
見えますかっ♡
私たちのま〇」
から出てる頭♡♡」

「特異点を修正する
任務を無視して
おじさまと作った子♡
ちやあんと見て
シ」っつてますかっ♡」

グムグム

「ねっ♡ねえ今どんな気持ちっ？私、寝取られた女が他人との子産むの見てシコる男の気持ちっってわからないからっ♡教えてくれる？(笑)」

みちあ

グムグム

「うう…♡♡♡
メルトお…♡♡♡
マシユウ…♡♡♡」

「なにその返事(笑)」

泣くほど悔しいっ♡「ムド、いいのがしら…♡♡♡」

「あはっ♡♡いい顔ですね先輩♡♡ふふ…それじゃあ「ム」しましよっ♡」

がっ

がっ

添

クモクモ

ズズズ

みちあ

「先輩の射精が私たちの身体まで届いたらあ…♡おじさまと二人目作らずに先輩と特異点を修正してカルデアに帰る♡それでどうですか？」

「おお、いいね♡藤丸くんまたとないチャンスだよ(笑)」

「……!!
ふうっ♡ふうっ♡
ふうっ♡ふうっ♡」

「なんだ、簡単じゃないっただ射精せばいいなんてほらほらあ——」

「決まりですね♡それじゃあ——」

「射精せつ♡」

短小童貞マスター♡♡♡

「射精せつ♡」

短小童貞マスター♡♡♡

「んんんんん♡♡♡」

セックス

セックス

セックス





ぢぢぢぢ

ぢぢぢぢ

ぢぢ

ぢぢぢぢ

ぢぢぢぢ

ほか

おおおお

ほか

「ぽろぽろ」

ちやあ

「.....」

おおおお

ほか



「は〜い、お疲れ様
二人ともよく産めました♡」

「お♡お♡
おじさまあ♡」

は〜♡

は〜♡

「同じタイミングで
ぴったり同時出産♡
偉いよ〜二人とも♡」

「あ〜…ありがとう♡
ご主人様あ♡」

は〜♡

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



「この子育て係…?」

「はい♡」

強いオスが好き放題

気に入ったメスを孕ませて

弱いオスが子を育てる♡

ごく当たり前のこと

でしよう?」

すよー♡♡

「童貞卒業資格もない上に寝取られマゾに堕ちた貴方の価値はもうその程度しか残っていないってこと」

身みの程ほどををわわききままええななさいさい♡♡

ぐろお

から

おぎやあ

「あ、あ……」

ギやあ

「まあそれがこのザルだからね♡悪いけど頼むよ藤丸くん♡」

せつ

せつ

せつ

あ

おぎやあ

「もちろん他のサーヴァントが産んだ子も全員♡一人ですよ♡」

「この特異点で童貞なのって貴方くらいだから(笑)マスターなら責任くらい持ちなさい」

カン

「お、俺…俺は……」

「うん、わかってるよー。自分の周りにいた子たちみりんな誰かに取られちやつた上にオナ禁…っていうか射精禁止の寸止めオナニー？毎日させられてるんでしょ(笑)そりゃあ脳みそ壊れてマゾち○ぽに改造されちやつても仕方ないよね♡」

マシュとの
絆レベル：0

「いや俺は…そうならなかったために……」

「ほらほら泣かないで♡」
「深く考えない方がいいよ(笑)」

「くすくす♡」
「くすくす♡」

メルトとの
絆レベル：0

「じゃあね、藤丸くん♡」
「お互い頑張ろうね♡(笑)」

「はい、おじさま♡」
「はい、主人様♡」

「ひひ、それじゃあ
行こうか、二人とも♡」



「.....」

やらなければならぬといひとは
たくさんある.....

はー♡♡♡

♡♡♡♡♡

特異点の修正は.....
もう少し先になりそうだ。

マシュとの
絆レベル：0

あ

せせ
のの

い
のの

せ
の

ぞ
お

か

メルトとの
絆レベル：0

あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

か

あ
あ
あ

あ
あ
あ



「.....」

やらなければならぬことは
たくさんある.....

はー♡♡

♡♡♡♡

特異点の修正は.....
もう少し先になりそうだ。

マシュとの
絆レベル：0

あ

ゼッ
ツ

ゼッ
ツ

ゼッ
ツ

あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

が
が
が

あ
あ
あ

あ
あ
あ

メルトとの
絆レベル：0

が



「.....」

やらなければならぬことは
たくさんある.....

特異点の修正は.....
もう少し先になりそうだ。

マシュとの
絆レベル：0

あ

せせ

あ

メルトとの
絆レベル：0

か

あ

あ

が

あ

あ

あ

あ

おしまい♡